

夢十夜

なつめ そうせき
夏目漱石

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元に坐っている、仰向に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭の柔らかな瓜実顔をその中に横たえている。真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。しかし女は静かな声で、もう死にますと判然云った。自分も確にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗き込むようにして聞いて見た。死にますとも、と云いながら、女はぼつちりと眼を開けた。大きな潤のある眼で、長い睫に包まれた中は、ただ一面に真黒であった。その真黒な眸の奥に、自分の姿が鮮に浮かんでいる。

自分は透き徹るほど深く見えるこの黒眼の色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思っただ。それで、ねんころに枕の傍へ口を付けて、死ぬんじやなかるうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。すると女は黒い眼を眠そうに睜たまま、やっぱり静かな声

でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、私の顔が見えるかいと一心に聞くと、見えるかいつて、そら、そこに、写っているじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思っただ。

しばらくして、女がまたこつ云った。

「死んだら、埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を墓標に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。また逢いに来ますから」

自分は、いつ逢いに来るかねと聞いた。

「日が出るでしょう。それから日が沈むでしょう。それからまた出るでしょう、そうしてまた沈むでしょう。赤い日が東から西へ、東から西へと落ちて行くうちに、

あなた、待っていられますか」

自分は黙って首肯した。女は静かな調子を一段張り上げて、

「百年待つていて下さい」「と思い切った声で云った。

「百年、私の墓の傍に坐って待っていて下さい。きつと逢いに来ますから」

自分はただ待つてしていると答えた。すると、黒い眸のなかに鮮に見えた自分の姿が、

瓜実顔…おもながで、ややふつくらとした感じの顔

ねんころ…心がこもっているさま。親切でいてねいなさま。
睜る…目を大きく見開いて見る。

一心に…ただ一つのこと心にこめて。

ぼうつと崩れて来た。静かな水が動いて写る影を乱したように、流れ出したと思った。女の眼がぱちりと閉じた。長い睫の間から涙が頬へ垂れた。もう死んでいた。自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で穴を掘った。真珠貝は大きな滑かな縁の鋭どい貝であった。土をすくうたびに、貝の裏に月の光が差してきらきらした。湿った土の匂もした。穴はしばらくして掘れた。女をその中に入れた。そうして柔らかい土を上からそつと掛けた。掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差した。

5

それから星の破片の落ちたのを拾って来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片は丸かった。長い間大空を落ちていた間に、角が取れて滑かになったんだろうと思った。抱き上げて土の上へ置くうちに、自分の胸と手が少し暖くなった。

10

自分は昔の上に坐った。これから百年の間こつとして待っているんだなと考えながら、腕組をして、丸い墓石を眺めていた。そのつぎに、女の云った通り日が東から出た。大きな赤い日であった。それがまた女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行った。一つと自分は勘定した。

「のつと…」と「めつと」
「同じ。」

唐紅…あざやかな
濃い紅色。深紅色。
天道…日。太陽。

15

しばらくするとまた唐紅の天道がのそりと上つて来た。そうして黙って沈んでしまった。二つとまた勘定した。

自分は「こう云う風に二つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らな

い。勘定しても、勘定しても、しつとせないほど赤い日が頭の上を通り越して行った。

それでも百年がまだ来ない。しまいには、昔の生えた丸い石を眺めて、自分は女に欺されたのではなかつかと思ひ出した。

すると石の下から斜に自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。見る間に長くなって

5

心持…ほんの少し。

ちようぶ自分の胸のあたりまで来て留まった。と思つくと、すざりと揺ぐ茎の頂に、心持首を傾けていた細長い一輪の薔が、ふつくつと弁を開いた。真白な百合が鼻の先で骨に徹するほど匂った。そこへ海の上から、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁の星がたった一つ瞬いていた。

10

骨に徹する…強く心にこたえる。つよく感じる。

「百年はもつと来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。

第二夜

こんな夢を見た。

和尚の室を退がって、廊下伝いに自分の部屋へ帰ると、行灯がぼんやり点っている。

15

行灯…昔の照明具で、木製・竹製などの四角の枠に紙をはり、中に油皿を置いて火をとますもの。

片膝を座蒲団の上に突いて、灯心を掻き立てたとき、花のような丁子がぱたりと朱塗の台に落ちた。同時に部屋がぱつと明かるくなった。

襖の画は 蕪村の筆である。黒い柳を濃く薄く、遠近とかいて、寒むそうな漁夫が笠を傾けて土手の上を通る。床には 海中文珠の軸が懸っている。焚き残した線香が暗い方でいまだに臭っている。広い寺だから 森閑として、人氣がない。黒い天井に差す丸行灯の丸い影が、仰向く途端に生きてるように見えた。

立膝をしたまま、左の手で座蒲団を捲って、右を差し込んで見ると、思った所に、ちゃんとあった。あれば安心だから、蒲団をもとのごとく直して、その上にとっかり坐った。

お前は侍である。侍なら悟れぬはずはなからうと和尚が云った。そういつまでも悟れぬところをもって見ると、御前は侍ではあるまいと言った。人間の屑じやと言った。ははあ怒ったなと云って笑った。口惜しければ悟った証拠を持って来いと云ってぐいと向をむいた。怪しからな。

隣の広間の床に据えてある置時計が次の刻を打つまでには、きつと悟って見せる。悟った上で、今夜また入室する。そうして和尚の首と悟りと引替にしてやる。悟らなければ、和尚の命が取れない。どうしても悟らなければならぬ。自分は侍である。

もし悟れなければ 自刃する。侍が 辱められて、生きている訳には行かない。綺麗に死んでしまじ。

こう考えた時、自分の手はまた思わず布団の下へ這入った。そうして 朱鞘の短刀を引き摺り出した。ぐつと束を握って、赤い鞘を向へ払ったら、冷たい刃が一度に暗い部屋で光った。凄いいものが手元から、すすすつと逃げて行くように思われる。そして、ごごとく切先へ集まって、殺気を一点に籠めている。自分はこの鋭い刃が、無念にも針の頭のように縮められて、九寸五分の先へ来てやむをえず尖っているのを見て、たちまちぐへさりとやりたくなかった。身体の血が右の手首の方へ流れて来て、握っている束がにちやにちやする。唇が顫えた。

短刀を鞘へ収めて右脇へ引きつけておいて、それから 全伽を組んだ。 趙州 曰く無と。無とは何だ。糞坊主めとはがみをした。

奥歯を強く咬み締めたので、鼻から熱い息が荒く出る。こめかみが釣って痛い。眼は普通の倍も大きく開けてやった。

懸物が見える。行灯が見える。畳が見える。和尚の 薬缶頭がありありと見える。鰐口を開いて嘲笑った声まで聞える。怪しからん坊主だ。どうしてもあの薬缶を首になくしてはならぬ。悟ってやる。無だ、無だと舌の根で念じた。無だと云うのにやっ

灯心：行灯やランプなどの油に浸して火をともしん。
丁子：灯心の燃えさしの頭にできたかたまりで、丁子の果実のような形になっているもの。
蕪村：与謝蕪村。江戸時代中期に活躍した俳人・画家。
遠近……あちこちちうこかしう。
海中文珠……ふつう文珠は「文殊」と書く。獅子に騎乗した文殊菩薩が侍者を従えて雲にのり、海を渡つてくるのを描いた仏教絵画。
森閑……物音が聞えずひっそりとしているさま。

怪しからん……道理礼儀などにはずれていて許しがたい。ふとどきだ。

自刃……刀剣を用いて自分の命を絶つこと。
辱められる……地位・名譽などをけがされる。
朱鞘……刀の鞘の朱色のもの。朱塗りの鞘。

九寸五分……短刀のこと。

全伽……坐禅の際の坐り方で、足の裏を組み合わせて安坐すること。
趙州……僧侶の名。

薬缶頭……毛がすっかり抜けて、やかんのように丸く光っている頭。
鰐口……人並みはずれて横に広い口をあざけてっていう語。

ばり線香の香がした。何だ線香のくせに。

自分はいきなり拳骨を固めて自分の頭をいやと云つほど攪った。そうして奥歯をきりぎりりと噛んだ。両腋から汗が出る。背中が棒のようになつた。膝の接目が急に痛くなつた。膝が折れたつてどうあるものかと思つた。けれども痛い。苦しい。無はなかなか出て来ない。出て来ると思つとすぐ痛くなる。腹が立つ。無念になる。非常に口惜しくなる。涙がほろほろ出る。ひと思に身を巨巖の上にぶつけて、骨も肉もめちやめちやに砕いてしまいたくなる。

それでも我慢してじつと坐っていた。堪えがたいほど切ないものを胸に盛れて忍んでいた。その切ないものが身体中の筋肉を下から持上げて、毛穴から外へ吹き出よう吹き出ようと思ふけれども、どこも一面に塞がって、まるで出口がないような残刻極まる状態であつた。

そのうちに頭が変になつた。行灯も蕪村の画も、畳も、連棚も有つて無いようになくつて有るように見えた。と云つて無はさつとも現前しない。ただ好加減に坐つていたようである。ところへ忽然隣座敷の時計がチーンと鳴り始めた。

はつと思つた。右の手をすく短刀にかけた。時計が二つ目をチーンと打つた。

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つてゐる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰れて、青坊主になつてゐる。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くとなに昔からさと答へた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等だ。

左右は 青田である。路は細い。鷲の影が時々闇に差す。

「田圃へかかったね」「と背中を云つた。

「だつて鷲が鳴くじゃないか」と答へた。

すると鷲がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖くなつた。こんなものを背負つてゐては、この先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなかるつかと向つを見ると闇の中に大きな森が見えた。あそこならばと考へ出す途端に、背中で、

「ぶぶん」と三声う声がした。

15

10

15

10

連棚…二枚の棚板を左右からさし出して、上下にくいちがうようにつつた。たな。とこのまのわきにつくることが多い。現前…目の前にあらわれ出ること。忽然…急に現れたり消えたりするさま。

青坊主…髪の毛を短く刈つた頭。また、そつした人。相違ない…違いない。

青田…稲の葉が青々と育つた田。まだ稲が実りきらない時期の田。

打遣やる…投げ捨てる。放り出す。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかった。ただ

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重があない」と答えると

「今に重くなるよ」と云った。

自分は黙って森を目標めくにあるいて行った。田の中の路みちが不規則ふたまたにうなわってなかなか思いつみに出られない。しばらくすると二股またになった。自分は股またの根ねに立って、ちよっと休んだ。

「石が立ってるはずだがな」と小僧が云った。

なるほど 八寸角はっすんかくの石が腰ほどの高さたかさに立っている。表には左り 日ヶ窪ひぐぼ 右 堀ぼり 田原たはらとある。間まだのに赤い字あかじが見えた。赤い字は井守いもりの腹はらのよつな色であった。

「左が好いだらう」と小僧が命令めいれいした。左を見るとさっきの森が闇の影を、高い空から自分らの頭の上へ投げかけていた。自分はちよっと 躊躇ちゆうじゆした。

「遠慮えんりよしないでいい」と小僧がまた云った。自分は仕方なしに森の方へ歩き出した。腹はらの中では、よく言田いんたのくせに何でも知ってるなと考かんえながら一筋道いちすぢみちを森へ近づいてくると、背中せなかで、「どつども言田いんたは不自由ふじゆうでいけないね」と云った。

「だから負おみつてやるからいいじゃないか」

「負おみぶつて負おみつてすまないが、どつども人に馬鹿ばかにされていけない。親おやにまで馬鹿ばかにされるからいけない」

何なにだか厭いやになった。早く森へ行って捨ててしまおうと思おもって急いそいだ。

「せまう少し行いくへと解とめ。ちよつとどんな晩ばんだったな」と背中せなかで独言ひとりごちのよつに云いつていゝ。

「何が」と 際きりどい声こゑを出でして聞いた。

「何がって、知しってるじゃないか」と子供は嘲あざわらけるよつに答こたえた。すると何なにだか知してるよつな気がし出した。けれども判然はんぜんとは分わらない。ただこんな晩ばんであったよつに思おもえる。そうしてもう少し行いけば分わるよつに思おもえる。分わつては大変だいぜんだから、分わらないうちに早く捨すててしまつて、安心あんしんしなくてはならないよつに思おもえる。自分自分はますます足を早はやめた。

雨あめはさつきから降ふっている。路みちはだんだん暗くくなる。ほとんど夢中むちゆうである。ただ背せ中に小さい小僧せうそうがくっついていて、その小僧せうそうが自分の過去かこ、現在げんざい、未来みらいをことごとく照てして、寸分すんぶんの事こと実じつも洩もれさな鏡かがみのよつに光あかりっている。しかもそれが自分自分の子である。そうして言田いんたである。自分自分はたまらなくなつた。

八寸角…二十四、五センチ四方の大きさ。

日ヶ窪…麻布区)今の港区にある地名
堀田原…当時は、南日ヶ窪町の北に華族の堀田氏の邸があり、その付近を指して呼んだものと思われる。
躊躇…あれこれと迷つて決心がつかないこと。ためらうこと。

際どい声…切迫した声。

寸分…ほんのわずか。

「じつだ、じつだ。ちょうどその杉の根の処だ」
雨の中で小僧の声は判然聞えた。自分は 覚えす留った。いつしか森の中へ這入っていた。一間ばかり先にある黒いものはたしかに小僧の云う通り杉の木と見えた。

「御父さん、その杉の根の処だったね」

「うん、そつだ」と思わず答えてしまった。

「文化五年辰年だろつ」

なるほど文化五年辰年らしく思われた。

「御前がおれを殺したのは今からちょうど百年前だね」

自分は「この言葉を聞くや否や、今から百年前文化五年の辰年のこんな闇の晩に、この杉の根で、一人の盲目を殺したと云う自覚が、忽然として頭の中に入った。おれは人殺であったんだなと始めて気がついた途端に、背中の子が急に石地藏のように重くなつた。」

10

第四夜

広い土間の真中に涼み台のようなものを据えて、その周囲に小さい 床几が並べて

15

ある。台は黒光りに光っている。片隅には四角な膳を前に置いて爺さんが一人で酒を飲んでゐる。肴は煮しめらしい。

爺さんは酒の加減でなかなか赤くなっている。その上顔中つやつやして皺と云うほどのものはどこにも見当らない。ただ白い髯をありたけ生やしているから年寄と云う事だけはわかる。自分は子供ながら、この爺さんの年はいくつなんだろつと思つた。

5

ところへ裏の 算から手桶に水を汲んで来た 神さんが、前垂で手を拭きながら、
「御爺さんはいくつかね」と聞いた。爺さんは頬張つた煮しめを呑み込んで、

「いくつか忘れたよ」と澄ましていた。神さんは拭いた手を、細い帯の間に挟んで横から爺さんの顔を見て立っていた。爺さんは茶碗のような大きなもので酒をぐいと飲んで、そつとつて、ぶつと長い息を白い髯の間から吹き出した。すると神さんが、

10

「御爺さんの家はどこかね」と聞いた。爺さんは長い息を途中で切つて、

「膳の奥だよ」と云つた。神さんは手を細い帯の間に突込んだまま、

「どこへ行くかね」とまた聞いた。すると爺さんが、また茶碗のような大きなもので熱い酒をぐいと飲んで前のよりうな息をぶつと吹いて、

「あつちへ行くよ」と云つた。

15

「真直かい」と神さんが聞いた時、ぶつと吹いた息が、障子を通り越して柳の下を抜

覚えす…自分が何を
しているか気づかな
いうちに。思わず。
一間…一間は約一、
六メートル。

文化五年…一八〇八
年。

床几…簡単な腰か
け。

煮しめ…野菜・鶏
肉・焼き豆腐・こんに
やくなどを味を濃
くしてじっくりと煮
上げたもの。

算…地上にかけ渡し
て水を通じさせる
と。い。
神さん…「上さん」
に同じ。商人・職人
などの主婦。気安い
場合など。一般の家
の主婦を呼ぶのにも
用いる。
前垂…「前掛け」に
同じ。

けて、河原の方へ真直に行った。

爺さんが表へ出た。自分も後から出た。爺さんの腰に小さい瓢箪がぶら下がっている。肩から四角な箱を腋の下へ釣るしている。浅黄の股引を穿いて、浅黄の袖無しを着ている。足袋だけが黄色い。何だか皮で作った足袋のように見える。

爺さんが真直に柳の下まで来た。柳の下に子供が三四人いた。爺さんは笑いながら腰から浅黄の手拭を出した。それを肝心鯛のように細長く鯛った。そうして地面の真中に置いた。それから手拭の周囲に、大きな丸い輪を描いた。しまいに肩にかけた箱の中から真鍮で製らえた飴屋の笛を出した。

「今にその手拭が蛇になるから、見ておろう。見ておろう」と繰返して云った。子供は一生懸命に手拭を見ていた。自分も見ている。

「見ておろう。見ておろう。好いか」と云いながら爺さんが笛を吹いて、輪の上をぐるぐる廻り出した。自分は手拭ばかり見ていた。けれども手拭はいつこつ動かなかった。

爺さんは笛をびいびい吹いた。そうして輪の上を何處も廻った。草鞋を爪立てるよう、拔足をするよう、手拭に遠慮をするよう、廻った。怖そうにも見えた。面白そうにもあった。

やがて爺さんは笛をびたりとやめた。そうして、肩に掛けた箱の口を開けて、手拭の首を、ちよいと擽た。ぽつと放り込んだ。

「いじこいでおくと、箱の中で蛇になる。今に見せてやる。今に見せてやる」と云いながら、爺さんが真直に歩き出した。柳の下を抜けて、細い路を真直に下りて行った。自分は蛇が見たいから、細い道をどこまでも追いつて行った。爺さんは時々、「今になる」と云ったり、「蛇になる」と云ったりして歩いて行く。しまいに、

「今になる、蛇になる、

きつくなる、笛が鳴る、

と唄いながら、とつとつ河の岸へ出た。橋も舟もないから、ここで休んで箱の中の蛇を見せるだろうと思っていると、爺さんはさぶさぶ河の中へ這入り出した。始めは膝くらいの高さであったが、だんだん腰から、胸の方まで水に浸って見えなくなる。

それでも爺さんは

「深くなる、夜になる、

真直になる、

と唄いながら、どこまでも真直に歩いて行った。そうして髯も顔も頭も頭巾もまるで見えなくなっていました。

浅黄：薄い黄色。

肝心鯛：紙を細幅に切つてねじり合わせ、ひも状にしたもの。
地面：「地べた」に同じ。
真鍮：銅と亜鉛との合金。

拔足：足音を出さないうで、そうと歩くこと。

自分は爺さんが向岸へ上がった時に、蛇を見せるだろうと思って、蘆の鳴る所に立って、たった一人いつまでも待っていた。けれども爺さんはとうとう上がって来なかった。

第五夜

こんな夢を見た。

何でもよほど古い事で、神代に近い昔と思われるが、自分が軍をして運悪く敗北のために、生擒になって、敵の大將の前に引き据えられた。

その頃の人はみんな背が高かった。そうして、みんな長い髻を生やしていた。草の帯を締めて、それへ棒のような剣を釣るしていた。弓は藤蔓の太いのをそのまま用いたように見えた。漆も塗ってなければ磨きもかけてない。極めて素樸なものであった。

敵の大將は、弓の真中を右の手で握って、その弓を草の上へ突いて、酒麩を伏せたようなものの上に腰をかけていた。その顔を見ると、鼻の上で、左右の肩が太く接続っている。その頃髪剃と云うものは無論なかった。

自分は虜だから、腰をかける訳に行かない。草の上に胡坐をかいていた。足には大きな藁沓を穿いていた。この時代の藁沓は深いものであった。立つと膝頭まで来た。

その端の所は藁を少し編残して、房のように下げて、歩くとはびばら動くようにして飾りとしていた。

大將は 篝火で自分の顔を見て、死ぬか生きるかと聞いた。これはその頃の習慣で、捕虜にはだれでも一応はこう聞いたものである。生きるか答えると降参した意味で、死ぬと云うと屈服しないと云う事になる。自分は一言死ぬと答えた。大將は草の上に突いていた弓を向うへ抛げて、腰に釣るした棒のような剣をすりと抜きかけた。それへ風に靡いた篝火が横から吹きつけた。自分は右の手を櫛のように開いて、掌を大將の方へ向けて、眼の上へ差し上げた。待てと云う相図である。大將は太い剣をかちやりと鞘に収めた。

その頃でも恋はあった。自分は死ぬ前に一目思う女に逢いたいと云った。大將は夜が明けて鶏が鳴くまでなら待つと云った。鶏が鳴くまでに女をここへ呼ばなければならぬ。鶏が鳴いても女が来なければ、自分は逢わずに殺されてしまふ。

大將は腰をかけたまま、篝火を眺めている。自分は大きな藁沓を組み合わせたまま、草の上で女を待っている。夜はだんだん更ける。

時々篝火が崩れる音がする。崩れるたびに狼狽えたように焔が大將になだれかかる。真黒な眉の下で、大將の眼がぴかぴかと光っている。すると誰やら来て、新しい枝を

蘆：水辺に群生するイネ科の多年草。

神代：日本神話で、神々が国を治めていたという時代。

篝火：夜、照明のために屋外で燃やす火。

掌：このひら。

たくさん火の中へ投げ込んで行く。しばらくすると、火がばちばちと鳴る。暗闇を弾き返すような勇ましい音であった。

この時女は、裏の櫓の木に繫いである、白い馬を引き出した。轡を三度撫でて高い背にひらりと飛び乗った。鞍もない鎧もない裸馬であった。長く白い足で、大腹を蹴ると、馬は いっさんに駆け出した。誰かが簀を継ぎ足したので、遠くの空が薄明るく見える。馬はこの明るいものを目懸けて闇の中を飛んで来る。鼻から火の柱のよつな息を二本出して飛んで来る。それでも女は細い足で、しきりなしに馬の腹を蹴っている。馬は蹄の音が宙で鳴るほど早く飛んで来る。女の髪は吹流しのように闇の中に尾を曳いた。それでもまだ簀のある所まで来られない。

すると真闇な道の傍で、たちまちこけこけこけこけという鶏の音がした。女は身を空様に、両手に握った手綱をつんと控えた。馬は前足の蹄を堅い岩の上に、発矢と刻み込んだ。

こけこけこけと鶏がまた一声鳴いた。

女はあつと云って、緊めた手綱を一度に緩めた。馬は 諸膝を折る。乗った人と共に真向へ前へのめった。岩の下は深い淵であった。

蹄の跡はいまだに岩の上に残っている。鶏の鳴く真似をしたものは 天探女である。

この蹄の痕の岩に刻みつけられている間、天探女は自分の敵である。

第六夜

運慶が 護国寺の山門で 仁王を刻んでいると云う評判だから、散歩ながら行って見ると、自分より先にもう大勢集まって、しきりに 下馬評をやっていた。

山門の前五六間の所には、大きな赤松があつて、その幹が斜めに山門の裏を隠して、遠い青空まで伸びている。松の緑と朱塗の門が互いに照り合ってみごとに見える。その上松の位地が好い。門の左の端を眼障にならないうつに、斜に切って行って、上になるほど幅を広く屋根まで突出しているのが何となく古風である。鎌倉時代とも思われる。

ところが見ているものは、みんな自分と同じく、明治の人間である。その中でも 車夫が一番多い。仕待をして退屈だから立っているに相違ない。

「大きなもんだなあ」と云っている。

「人間を捲げるよりもよっぽど骨が折れるだろう」とも云っている。

そうかと思つて、「へえ仁王だね。今でも仁王を彫るのかね。へえそうかね。私や

大腹：馬などの、腹のふくらんで垂れた部分。

いっさんに：わき目もふらずに走って、しきりなしに「ひっきりなしに」に同じ。

吹流し：長いさおの先につけた細長い布やこいのほりのように、風に吹きなびくもの。

空様：上へのびあがるようなさま。

発矢と：強く打った矢がぶつかりするさま。

諸膝：左右の膝。両膝。

天探女：「天の邪鬼」とも書く。人の言うことややること、わざと反対をしたり、じゃまをしたりする人。

運慶：鎌倉時代前期に活躍した仏像彫刻家。

仁王：寺の門の両わきに置かれる、仏法を守護する神の像。

護国寺：東京都文京区にある新義真言宗豊山派の大本山。

下馬評：世間の人々によるうわさや評判。

車夫：人力車を引いている人。
仕待：道ばたで、人力車を引いている車夫が客を待っていること。

また仁王はみんな古いのばかりかと思つてた」と云つた男がある。

「じつしま強そしつですな。なんだつてえませ。昔から誰が強いつて、仁王ほど強い人あ無いつて云いますぜ。何でも日本武尊やまとたけのみことよりも強いんだつてえからな」と話しかけた男もある。「この男は尻を端折はしりつて、帽子を被かぶらずにいた。よほど無教育な男と見える。

運慶は見物人の評判には委細とんじやへく頓着とんちやくなく撃うと槌つちを動かしている。いっこう振り向きもしない。高い所に乗つて、仁王の顔の辺あたひをしまりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子えぼしのよつなものを乗せて、素袍すわうだか何だかわからない大きな袖そでを背せなか中で括くくつている。その様子がいかにも古くさい。わいわい云つてる見物人とはまるで釣り合あひが取れないようである。自分はどつして今時分まで運慶が生きているのかなと思つた。どうも不思議な事があるものだと考えながら、やはり立つて見ていた。

しかし運慶の方では不思議とも奇体きたいともとんと感じ得ない様子で一生涯命に彫つている。仰向おほむかいてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分の方を振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なした。天下の英雄はただ仁王と我われとあるのみと云う態度だ。天晴あじはれだ」と云つて賞ほめ出した。

自分は「この言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男の方を見ると、若い男はすかさず、

「あの撃と槌の使い方を見たまえ。大自在だいじざいの妙境めうけいに達している」と云つた。

運慶は今太い眉まゆを一寸の高さに横へ彫り抜いて、撃うの齒はを堅たてに返すや否いなや斜はすに上から槌つちを打ち下した。堅かい木きをひと刻ときみに削けずつて、厚あい木屑まが槌つちの声こゑに應こたじて飛んだと思つたら、小鼻こはなのおつ開ひらいた怒り鼻はなの側面わきめんがたちまち浮うき上がつて来た。その刀やの入れ方がいかにも無遠慮むゑんりょであつた。そうして少しも疑念ぎねんを挟はさんでおらんように見え

た。「よくああ無造作むぞうさくに撃うを使って、思おもつよつな眉まゆや鼻はなができるものだな」と自分はあんまり感心かんしんしたから独言ひとりごとのやうに言つた。するどなき若い男が、

「なに、あれは眉まゆや鼻はなを撃うで作るんじゃない。あの通りの眉まゆや鼻はなが木の中に埋まつてい

るのを、撃うと槌つちの力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すよつなものでからけつして間違まちがつはすはな」と云つた。

自分はこの時始めて彫刻とはそんなものかと思ひ出した。はたしてそうなら誰にでもできる事だと思ひ出した。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめてさつそく家うちへ帰つた。

日本武尊…景行天皇の皇子。日本神話の中で最も武力に優れた英雄の一人。
端折る…着物の裾をからけて端を帯などにはさむ。
委細…こまごまとした事情。何じとも頓着…とんちやく。同じ。気にかけること。
烏帽子…昔、公家、武家などの成人男子がつけたかぶり物。
素袍…麻地で、自分の家の紋をつけた衣服。

奇体…「奇態」同じ。風変わりなさま。

大自在…思いのまま。じやまするものがなく、思うとおりになること。
妙境…芸術・技芸などの絶妙の境。佳境。妙所。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出て見ると、 せんだつての暴風で倒れた檣を、薪にするつもりで、 木挽に挽かせた手頃な奴が、 たくさん積んであった。 自分は一番大きいのを選んで、 勢いよく彫り始めて見たが、 不幸にして、 仁王は見当らなかつた。 その次のにも運悪く掘り当てる事ができなかつた。 三番目のにも仁王はいなかつた。 自分は積んである薪を片っ端から彫って見たが、 どれもこれも仁王を蔵しているのはなかつた。 ついに明治の木にはとつてい仁王は埋っていないものだと悟つた。 それで運慶が今日まで生きている理由もほほ解つた。

第七夜

何でも大きな船に乗っている。

この船が毎日毎夜すこしの絶間なく黒い煙を吐いて浪を切って進んで行く。 凄じい音である。 けれどもどこへ行くんだか分らない。 ただ波の底から 焼火箸のような太陽が出る。 それが高い帆柱の真上まで来てしばらく挂っているかと思つと、 いつの間にか大きな船を追い越して、 先へ行ってしまふ。 そうして、 しまいには焼火箸のようにじゅつといつてまた波の底に沈んで行く。 そのたんびに着い波が遠くの向うで、 蘇枋

15

焼火箸：炭火などを
はさむのに使う金
属製の火箸が、火
であぶられて熱く
なっているもの。
蘇枋：まめ科の小高
木。枝にとげがあ
り、黄色の花をつ
ける。

の色に沸き返る。すると船は凄じい音を立ててその跡を追かけて行く。 けれども決して追つかない。

ある時自分は、船の男を捕まえて聞いて見た。

「この船は西へ行くんですか」

船の男は 怪訝な顔をして、しばらく自分を見ていたが、 やがて、
「なぜ」と問い返した。

5

怪訝：その場の事情
などがわからず、納
得がいけないさま。

「落ちて行く日を追かけるようだから」

船の男はからからと笑つた。 そうして向うの方へ行つてしまつた。

「西へ行く日の、 果は東か。 それは 本真か。 東出る日の、 御里は西か。 それも本真か。 身は波の上。 枕。 流せ流せ」と囁している。 舳へ行って見たら、 水夫が大勢寄つて、 太い帆綱を手繰っていた。

10

本真：関西地方で
まこと。 本当。
枕：船中で寝ること。
舳：船先。 船首。
みよし。

自分は大変心細くなつた。 いつ陸へ上げられる事が分らない。 そうしてどこへ行くの
だか知れない。 ただ黒い煙を吐いて波を切つて行く事だけはたしかである。 その波は
すこぶる広いものであつた。 際限もなく蒼く見える。 時には紫にもなつた。 ただ船
の動く周囲だけはいつても真白に泡を吹いていた。 自分は大変心細かつた。 こんな船
にいるよりいつそ身を投げて死んでしまおうかと思つた。

15

乗合はたくさんいた。たいていは 異人のようであった。しかしいろいろな顔をしていた。空が曇って船が揺れた時、一人の女が欄に倚りかかって、しきりに泣いていた。眼を拭く手巾の色が白く見えた。しかし身体には 更紗のような洋服を着ていた。この女を見た時に、悲しいのは自分ばかりではないのだと気がついた。

ある晩甲板の上に出て、一人で星を眺めていたら、一人の異人が来て、天文学を知ってるかと尋ねた。自分はつまらないから死のつとさえ思っている。天文学などを知る必要がない。黙っていた。するとその異人が 金牛宮の頂にある 七星の話を聞いて聞かせた。そうして星も海もみんな神の作ったものだと言った。最後に自分に神を信仰するかと尋ねた。自分は空を見て黙っていた。

或時サロンに這入ったら派手な衣裳を着た若い女が向つむきになって、洋琴を弾いていた。その傍に背の高い立派な男が立って、唱歌を唄っている。その口が大変大きく見えた。けれども二人は二人以外の事にはまるで頓着していない様子であった。船に乗っている事を覚えていたようであった。

自分はますますつまらなくなつた。とつとつ死ぬ事に決心した。それである晩、あたりに人のいない時分、思い切つて海の中へ飛び込んだ。ところが 自分の足が甲板を離れて、船と縁が切れたその刹那に、急に命が惜しくなつた。心の底からよせばよかつたと思つた。けれども、もう遅い。自分は 厭でも海の中へ這入らなければならぬ。ただ大変高くできていた船と見えて、身体は船を離れたけれども、足は容易に水に着かない。しかし捕まえるものがないから、しだいしだいに水に近づいて来る。いくら足を縮めても近づいて来る。水の色は黒かつた。

そのうち船は例の通り黒い煙を吐いて、通り過ぎてしまつた。自分はどこへ行くんだか判らない船でも、やっぱり乗っている方がよかつたと始めて悟りながら、しかもその悟りを利用する事ができずに、無限の後悔と恐怖とを抱いて黒い波の方へ静かに落ちて行つた。

第八夜

床屋の敷居を跨いだら、白い着物を着てかたまつていた三四人が、一度にいらつしやいと云つた。

真中に立つて見廻すと、四角な部屋である。窓が二方に開いて、残る二方に鏡が懸っている。鏡の数を勘定したら六つあつた。

自分はその一つの前へ来て腰をおろした。すると御尻がぶくりと云つた。よほど坐

乗合 同じ船・車などに大勢の客がいつしよに乗ること。
異人 外国人。
更紗 ちめん地や絹地に人物・花鳥・幾何的模様などを種々の色でプリントした布。
金牛宮 太陽が一年間に十二の宮を順に移動すると考えられた。黄道十二宮の第七宮。
七星 北斗七星のこと。

厭でも海でも…そうする気がなくてもあつても。

り心地が好くできた椅子である。鏡には自分の顔が立派に映った。顔の後には窓が見えた。それから 帳場格子が斜に見えた。格子の中には人がいなかった。窓の外を通る往来の人の腰から上がよく見えた。

庄太郎が女を連れて通る。庄太郎はいつの間にか パナマの帽子を買って被っている。女もいつの間にか抱えられたものやら。ちょっと解らない。双方とも得意のようであった。よく女の顔を見ようと思いつくうちに通り過ぎてしまった。

豆腐屋が喇叭を吹いて通った。喇叭を口へあてがっているんで、頬べたが蜂に整されたように膨れていた。膨れたまんまで通り越したものだから、気がかりでたまらない。生涯蜂に整されているように思う。

昔者が出た。まだ御化粧をしていない。島田の根が緩んで、何だか頭に締りが無い。顔も寝ぼけている。色沢が気の毒なほど悪い。それで御辞儀をして、どうも何とかですと云ったが、相手はどうしても鏡の中へ出て来ない。

すると白い着物を着た大きな男が、自分の後ろへ来て、鍬と櫛を持って自分の頭を眺め出した。自分は薄い髪を抜つて、どうだろう物になるだろうかと尋ねた。白い男は、何にも云わずに、手に持った琥珀色の櫛で軽く自分の頭を叩いた。

「さあ、頭もだが、どうだろう、物になるだろうか」と自分は白い男に聞いた。白い男はやはり何も答えずに、ちゃきちゃきと鍬を鳴らし始めた。

鏡に映る影を一つ残らず見るつもりで眼を睜けていたが、鍬の鳴るたびに黒い毛が飛んで来るので、恐ろしくなつて、やがて眼を閉じた。すると白い男が、「どう云った。旦那は表の金魚売を御覧なすったか」

自分は見ないと云った。白い男はそれきりで、しきりと鍬を鳴らしていた。すると突然大きな声で危険と云ったものがある。はっと眼を開けると、白い男の袖の下に自転車の輪が見えた。人力の 梶棒が見えた。と思つて、白い男が両手で自分の頭を押えてうんと横へ向けた。自転車と人力車はまるで見えなくなった。鍬の音がちゃきちゃきする。

やがて、白い男は自分の横へ廻つて、耳の所を刈り始めた。毛が前の方へ飛ばなくなつたから、安心して眼を開けた。栗餅や、餅やあ、餅や、と云う声がすぐ、そこです。小さい杵をわざと白へあてて、拍子を取つて餅を搗いている。栗餅屋は子供の時に見たばかりだから、ちょっと様子が見たい。けれども栗餅屋はけつして鏡の中に出て来ない。ただ餅を搗く音だけする。

自分はあるだけの視力で鏡の角を覗き込むようにして見た。すると帳場格子のうちに、いつの間にか一人の女が坐っている。色の浅黒い眉毛の濃い大柄な女で、髪を

帳場：商店などで、会計をするところ。

パナマの帽子：パナマ草の若葉を細く裂いてさらし、編んで作った夏帽子。

島田：島田鬘のこと。日本髪の変型の一つ。主に若い女性がゆづ。

梶棒：人力車や荷車を引く張るため前方に付けられた長い棒。

栗餅：蒸した糯栗をついた餅。

銀杏返しに結って、黒纏子の半襟のかかった素袷で、立膝のまま、札の勘定をしている。札は十円札らしい。女は長い睫を伏せて薄い唇を結んで一生懸命に、札の数を数えているが、その読み方がいかにも早い。しかも札の数はどこまで行っても尽きる様子がない。膝の上に乗っているのはただか百枚くらいだが、その百枚がいつまで勘定しても百枚である。

自分は茫然としてこの女の顔と十円札を見つめていた。すると耳の元で白い男が大きな声で「洗いましよ」と云った。ちよつとつまい折だから、椅子から立ち上がるや否や、帳場格子の方をふり返って見た。けれども格子のうちには女も札も何にも見えなかった。

代を払って表へ出ると、門口の左側に、小判なりの桶が五つばかり並べてあって、その中に赤い金魚や、斑入の金魚や、瘦せた金魚や、肥った金魚がたくさん入っていた。そうして金魚売がその後についていた。金魚売は自分の前に並べた金魚を見つめたまま、頬杖を突いて、じっとしている。騒がしい往来の活動にはほとんど心を留めていない。自分はしばらく立ってこの金魚売を眺めていた。けれども自分が眺めている間、金魚売はちつとも動かなかった。

第九夜

世の中が何となくさわつき始めた。今にも戦争が起りそうに見える。焼け出された裸馬が、夜昼となく、屋敷の周囲を暴れ廻ると、それを夜昼となく足輕共が犇きながら追かけているような心持がする。それでいて家のつちばは森として静かである。

家には若い母と三つになる子供がいる。父はどこかへ行った。父がどこかへ行ったのは、月の出ていない夜中であった。床の上で草鞋を穿いて、黒い頭巾を被って、勝手口から出て行った。その時母の持っていた雪洞の灯が暗い闇に細長く射して、生垣の手前のある古い檜を照らした。

父はそれきり帰って来なかった。母は毎日三つになる子供に「御父様は」と聞いている。子供は何とも云わなかった。しばらくしてから「あつち」と答えるようになって。母が「いつ御帰り」と聞いてもやはり「あつち」と答えて笑っていた。その時は母も笑った。そうして「今に御帰り」と云う言葉を何遍となく繰返して教えた。けれども子供は「今に」だけを覚えたのみである。時々「御父様はどこ」と聞かれて「今に」と答える事もあった。

夜になって、四隣が静まると、母は帯を締め直して、鮫鞘の短刀を帯の間へ差し

銀杏返し：日本髪の一つ。頭の上に束ねた髪を左右に二分し、半円形に曲げてイチョウの葉のよう

にゆったもの。

黒纏子：布面がなめらかでつやがあり、縦糸または横糸を浮かした織物で、黒色のもの。

半襟：和服用の肌着であるじゅばんのえりにつける、飾りのための小さい布。

素袷：素肌に着る春や秋に着る裏地つきの和服を着る。こゝで意気な感じとされて

小判なり：「こばんがた」に同じ。小判の形。だ円形。

雪洞：紙でおおいをした小さい行灯。または小さいしよく台。

鮫鞘：鮫皮を巻いてつくった刀のさや。

て、子供を細帯で背中へ背負つて、そつと潜りから出て行く。母はいつでも草履を穿いていた。子供はこの草履の音を聞きながら母の背中で寝てしまつ事もあった。

土堀の続いている屋敷町を西へ下つて、だらだら坂を降り尽くすと、大きな銀杏がある。この銀杏を目標に右に切れると、一丁ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃で、片側は熊笹ばかりの中を鳥居まで来て、それを潜り抜けると、暗い杉の木立になる。それから二十間ばかり敷石伝いに突き出ると、古い拝殿の階段の下に出る。鼠色に洗ひ出された寶錢箱の上に、大きな鈴の紐がぶら下がって昼間見ると、その鈴の傍に八幡宮と云う額が懸つている。八の字が、鳩が二羽向いあつたような書体にできているのが面白い。そのほかにもいろいろの額がある。たいていは家中のものの射抜いた金的を、射抜いたものの名前に添えたのが多い。たまには太刀を納めたのもある。

鳥居を潜ると杉の梢でいつでも鳥が鳴いている。そつして、冷飯草履の音がびちゃびちゃする。それが拝殿の前でやむと、母はまず鈴を鳴らしておいて、すべにしゃがんで拍手を打つ。たいていはこの時鳥が急に鳴かなくなる。それから母は一心不乱に夫の無事を祈る。母の考えでは、夫が侍であるから、弓矢の神の八幡へ、こつやつて是非ない願をかけたら、よもや聴かれぬ道理はなからうと一図に思ひつめてゐる。

子供はよくこの鈴の音で眼を覚まして、四辺を見ると真暗だものだから、急に背中で泣き出す事がある。その時母は口の内で何か祈りながら、背を振つてあやそつとする。すると直ぐ泣きやむ事もある。またますます烈しく泣き立てる事もある。いすれにこつても母は容易に立たない。

一通り夫の身の上を祈つてしまつと、今度は細帯を解いて、背中の子を摺りおろす。よつと、背中から前へ廻つて、両手に抱きながら拝殿を上つて行つて、「好い子だから、少しの間、待つておいでや」ときつと自分の頬を子供の頬へ擦りつける。そつして細帯を長くして、子供を縛つておいて、その片端を拝殿の欄干に括りつける。それから段々を下りて来て二十間の敷石を往つたり来たり、御百度を踏む。

拝殿に括りつけられた子は、暗闇の中で、細帯の女のゆるす限り、広縁の上を這い廻っている。そつと云う時は母にとつて、はなはだ案な夜である。けれども縛つた子にひいひい泣かれると、母は気がでない。御百度の足が非常に早くなる。大変息が切れる。仕方のない時は、途中で拝殿へ上つて来て、いろいろすかしておいて、また御百度を踏み直す事もある。

「こつと云う風に、幾晩となく母が氣を揉んで、夜の目も覆すに心配していた父は、とくの昔に浪士のために殺されたのである。」

潜り：くぐつて入る戸や門、くぐり戸やくぐり門。

だらだら坂：傾斜のゆるやかなくだりさか。

一丁：一町。約一九メートル。拝殿：礼拝をおこなうために設けた神社の前置。

八幡宮：八幡神をまつる神社の総称。

金的：一寸四方ぐらいの金色の枝の中央に、直径三分ばかりの円を描いた的。的の中で最も小さく、これを射当てることは最高技術とされてゐる。

冷飯草履：わらの緒のついた粗末なわら草履。

きつと：たしかに。必ず。しつかり。

欄干：人が落ちるのを防いだり、飾りしたりするために柱や廊下のふちにつける、手すり。

御百度：寺などの境内の一定の距離を百回お参りをし、願いがかなうつたいの。

すかす：相手のきげんをこつて、こつちの言つたことをきかせ

夜の目：よめるの目。夜眠る目。浪士：仕える主家をもたない武士。

こんな悲い話を、夢の中で母から聞いた。

第十夜

庄太郎が女に攫さらわれてから七日目の晩にふらりと帰って来て、急に熱が出てと、床に就ついていると云って健けんさんが知らせに来た。

庄太郎は町内一の好男子こうなんしで、至極善良しじくぜんりやうな正直者である。ただ一つの道楽がある。バナナの帽子を被かぶって、夕方になると水菓子屋みずがしやの店先へ腰をかけて、往来の女の顔を眺めている。そうしてしきりに感心している。そのほかにはこれと云うほどの特色もない。

あまり女が通らない時は、往来を見ないで水菓子を見ている。水菓子にはいろいろある。水蜜桃すいみつとうや、林檎りんごや、枇杷びわや、バナナを綺麗きれいに籠かごに盛かって、すぐ見舞物みやげものに持って行けるように二列に並べてある。庄太郎はこの籠かごを見ては綺麗だと云っている。商売をするなら水菓子屋に限ると云っている。そのくせ自分はバナナの帽子を被かぶってぶら遊んでいる。

この色がいいと云って、夏蜜柑なつみかんなどを品評する事もある。けれども、かつて銭ぜにを出して水菓子を買った事がない。ただでは無論食わない。色ばかり賞ほめている。

ある夕方一人の女が、不意に店先に立った。身分のある人と見えて立派な服装をしている。その着物の色がひどく庄太郎の気に入った。その上庄太郎は大変女の顔に感心してしまった。そこで大事なバナナの帽子を脱とって丁寧ていねいに挨拶あいさつしたら、女は籠かご詰つめの一番大きいのを指さして、これを下さいと云うので、庄太郎はすぐその籠かごを取って渡した。すると女はそれをちよつと提さげて見て、大変重い事と云った。

庄太郎は元来閑人がらんじんの上に、すこぶる気作きさくな男だから、ではお宅まで持って参りましようと言いって、女といっしょに水菓子屋を出た。それぎり帰って来なかった。

いかな庄太郎でも、あんまり呑気のんき過ぎる。只事ただごとじゃ無なかろうと云って、親類や友達が騒さわぎ出でしていると、七日目の晩になって、ふらりと帰って来た。そこで大勢寄よってたかつて、庄さんどこへ行っていたんだいと聞くと、庄太郎は電車へ乗って山へ行っただと答えた。

何でもよほど長い電車に遭あわない。庄太郎の云つところによると、電車を下りるとすぐと原へ出たそうである。非常に広い原で、どこを見廻しても青い草ばかり生はえていた。女といっしょに草の上を歩いて行くと、急に絶壁きぜきの天辺てんぺんへ出た。その時女が庄太郎に、ここから飛び込んで御覽ごらんなさいと云った。底を覗のぞいて見ると、切岸きりぎしは見え

好男子：快活で男らしい男。男ぶりのよい男。美男子。水菓子：食用とするくだもの。

気作：気性がさつぱりしていて、物事にこだわらない。

すぐと：すぐに。すぐじきに。絶壁：切りたてたよつなけわしいがけ。

るが底は見えない。庄太郎はまたバナマの帽子を脱いで再三辞退した。すると女が、もし思い切って飛び込まなければ、豚に舐められますが好うござんすかと思いた。庄太郎は豚と雲右衛門が大嫌だった。けれども命には易えられないと思って、やっぱり飛び込むのを見合せていた。ところへ豚が一匹鼻を鳴らして来た。庄太郎は仕方なしに、持っていた細い檳榔樹の洋杖で、豚の鼻頭を打った。豚はぐうと云いながら、ころりと引っ繰り返って、絶壁の下へ落ちて行った。庄太郎はほっと一息接いでいるとまた一匹の豚が大きな鼻を庄太郎に擦りつけに来了。庄太郎はやむをえずまた洋杖を振り上げた。豚はぐうと鳴いてまた真逆様に穴の底へ転げ込んだ。するとまた一匹あらわれた。この時庄太郎はふと気がついて、向うを見ると、遥の青草原の尽きる辺から幾万匹か数え切れぬ豚が、群をなして一直線に、この絶壁の上に立っている庄太郎を目懸けて鼻を鳴らしてくる。庄太郎は心から恐縮した。けれども仕方がないから、近寄ってくる豚の鼻頭を、一つ一つ丁寧に檳榔樹の洋杖で打っていた。不思議な事に洋杖が鼻へ触りさえすれば豚はころりと谷の底へ落ちて行く。覗いて見ると底の見えない絶壁を、逆さになった豚が行列して落ちて行く。自分がこのくらい多くの豚を谷へ落したかと思うと、庄太郎は我ながら怖くなった。けれども豚は続々くる。黒雲に足が生えて、青草を踏み分けるような勢いで、無尽蔵に鼻を鳴らしてくる。

15

庄太郎は必死の勇をふるって、豚の鼻頭を七日六晩叩いた。けれども、とうとう精根が尽きて、手が弱弱のように弱って、しまいに豚に舐められてしまった。そうして絶壁の上へ倒れた。

健さんは、庄太郎の話をここまでして、だからあんまり女を見るのは善くないよと云った。自分ももつともだと思つた。けれども健さんは庄太郎のバナマの帽子が買いたいと云っていた。

5

庄太郎は助かるまい。バナマは健さんのものだろう。

10

雲右衛門：明治六年 大正五年。本名は岡本峰吉。浪曲師。
檳榔樹：ヤシ科の常緑高木。インドネシア・マレーシア地方の原産。アジア熱帯や南太平洋地方に広く栽培される。

心から…心から。心の底から。

無尽蔵に…限りなく。

15